



Washington Japanese Language School

ワシントン日本語学校

はなみずき

mail:wjls@wjls.org <http://www.wjls.org/>



2021年2月20日発行 第37号

ワシントン日本語学校
校長 森 宏 介

[ワシントン日本語学校事務局]
HOT LINE (301)962-7415
TEL (301)962-7410
FAX (301)962-7411

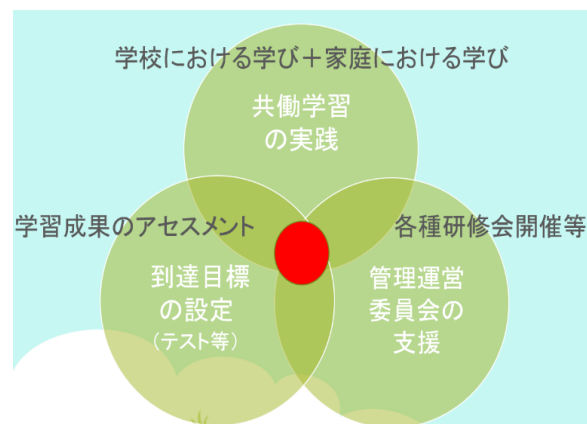
国語力向上プラン説明会で話した概要をお伝えします

本日、国語力向上プラン説明会を実施しましたところ、多くの方々にご参加いただきました。深く感謝いたします。
今回の「はなみずき」では、その概要についてお知らせすることにいたします。

国語力向上プランの3本柱

児童生徒の国語力を向上させるカギは、ズバリ共働学習、すなわち、学校と家庭がそれぞれの役割を果たす事に尽きます。また、共働学習が機能しているか、その成果が表れているかどうかを確かめることも必要です。それを見極めるためには、到達目標の設定とアセスメントが欠かせないと考えました。

もうひとつ大切な要素があります。それが「管理運営委員会の支援」です。教員や保護者向けの研修会を開催するなどして、学校・家庭共々実践力を高めることはとても大切です。私は、これら3つを国語力向上ベーシックプランの3本柱と名付けました。

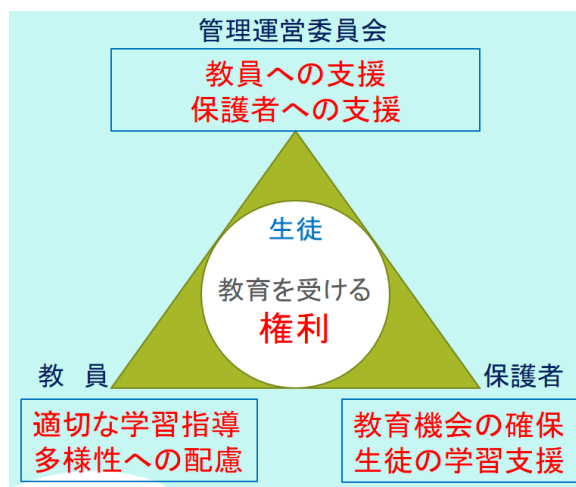


ベーシックプランの3本柱

3本柱のひとつが欠けても国語力向上というの目標達成は困難でしょう。共働学習の実践という自助努力に加え、管理運営委員会の支援という共助を支えに目標達成を目指していききたいと思います。

教員・保護者・管理運営委員会の役割

日本国憲法は、子供の「学ぶ権利」を保障しています。また、保護者には「教育を受けさせる義務」を課しています。管理運営委員会は学習機会を提供する役割をもち、教員は実際に指導にあたります。



プラン実施にあたっての三者の役割

このことを前提に、私は、教員に「わかる喜び・できる楽しさを味わうことができる学習指導」と「国語力が必ずしも十分でない生徒に対する個別の支援」を、保護者には、「第2の担任として学校と軌を一にした学習支援」と「教育機会の確保と生徒の実態把握」をお願いしたいと思います。また、派遣教員を含む管理運営委員会は、「国語力が十分でない生徒が楽しく学ぶための支援や配慮」に加え「共働学習がしっかりと機能し成果をあげているか」に常に目を向け、必要な措置を講じていくことを求めたいと思います。

国語力向上ベーシックプランで目指す目標を図示します

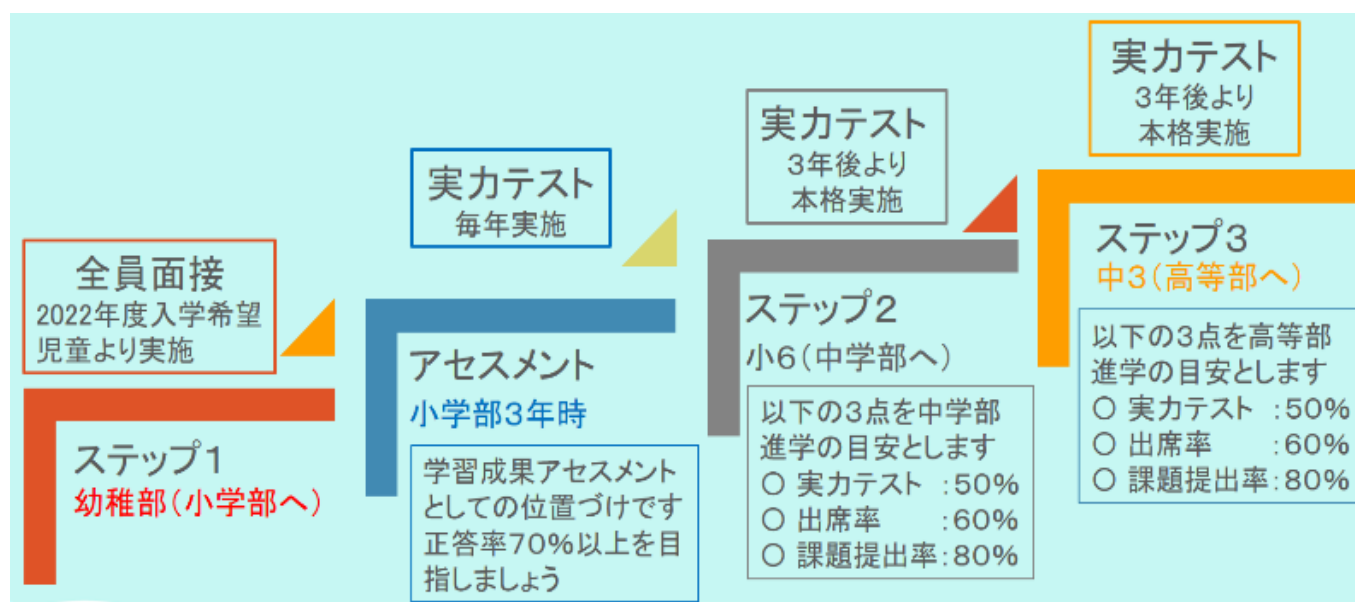
学校は、児童・生徒の「学びに向かう力」と保護者の「共働学習」参加状況を重視します。それらは出席率・課題提出率に現れます。日常の学習におきましては、出席率60%以上を、課題提出率については80%以上を目指しましょう。

学校は、学習に参加し課題をこなそうと頑張る児童・生徒を心から応援します。「国語力に課題がある」との理由だけで進級させないという決定をすることはありません。但しそれは、幼稚部・小学部・中学部で区切られたステージ上に限ります。

上の学部に進級するにあたっては、学習に最低限必要だと考えられる国語力を求めます。図に示す、到達目標を達成できるよう、共に力を合わせていきましょう。

昨年度提案しておりましたように、小学部3年生と6年生の当初、実力テストを実施します。6年生の実力テストの結果は、中学部進級の可否を判断する材料のひとつとなります。そのほかにも、小学部と中学部では、学習の達成状況を見極めることを目的に、前期の学習終了時に「まとめテスト」を実施します。

国語力向上ベーシックプランで目指す目標



上の図は、目指す目標を図に表したものです。

これまで、小学部への進学を希望する幼稚部の児童を対象にした面接は行っていませんでしたが、来年度より、入学希望者全員を対象に面接を実施いたします。

小学部3年生の段階で「実力テスト」を実施します。これは、低学年の学習内容をしっかりと身につけているかどうかを確かめるためのものです。正答率70%以上を目指しましょう。学習成果アセスメントとしての位置づけですので、70点を越えなければ進級できないというわけではありません。

中学・高校進学の可否を判断する目安は、現時点で「実力テスト50%」「出席率60%」「課題提出率80%」を想定しています。いずれも、完全実施は3年後としていますので、児童生徒の状況を軸に、保護者や教員の意見を聞きながら、最終的なラインを決めていくことが大切であると考えています。

学習にあたって最低限必要な国語力を欠いたまま進級・進学すると十分な成果を得ることができないだけでなく、生徒自身が苦しい思いをすることが危惧されます。これから3年間かけて、日本語力の向上を目指していきましょう。